

オットー・バウアーのファシズム論

上 条 勇

I はじめに

通例オットー・バウアーは、「ボナパルティズムとの類似性の指摘の上に独自のファシズム論を展開しようとした」論者の一人として考えられている。つまり、バウアーは、ブルジョワジーもプロレタリアートも単独では統治しえない「階級諸力の均衡」状態では、諸階級の上に立つカースト支配の生ずる可能性がある」と指摘し、このカースト支配の体制の一つとしてファシズムを論じたとされている。山口定氏は、かつてこの観点からバウアーのファシズム論をわが国に紹介している。¹⁾

この点、確かに1920年代には、バウアーは、イタリアを念頭に起きつつ、「階級諸力の均衡」の観点からファシズムに言及し続けた。しかし、1930年代には、バウアーは、「階級諸力の均衡」視点を形の上では維持しつつも、大衆運動として展開していくファシズムの独自の運動に注目してファシズム論を本格的に展開している。また、その遺稿では、帝国主義との関連で政治・経済の支配体制に立ち入ってファシズムを論じている。上記のバウアー理解は、この点を見落とし、片手落ちであるといえる。むしろ、バウアーによるファシズム論が1930年代に入って本格的に展開されたことを考えると、バウアーについて誤まったイメージを与えるものであったとさえ言える。

山口氏についていえば、氏は、1930年代のバウアーの論稿を取り上げつつ、バウアー・ファシズム論を紹介されている。しかし、氏は、あくまでもボナパルティズム論の枠内でバウアーのファシズム論を評価しようとすることによって、バウアーの見解の重要な諸論点を切り落としてしまう。小稿は、山口氏のこのバウアー理解を批判しつつ、1930年代のバウアー・ファシズム論を正確にとらえるために、改めてその全体像を考察するものである。

1) 山口定『現代ファシズムの諸潮流』有斐閣、1976年

II 二つの大戦の間？

バウアーは、1936年に『二つの大戦の間？』という著書のなかで、初めてファシズム論を体系的かつ本格的に論じている。¹⁾以下、これを立ち入って紹介したい。

1) Otto Bauer, *Zwischen zwei Weltkriegen?*, in: *Otto Bauer. Werkausgabe* (以下、WA.), Europaverlag, Bd.4. 以下、この著書からの引用等の出所については、本文中にページ数のみを示す。

(1) 独自の大衆運動としてのファシズム

まずバウアーは、すべての反革命がファシズムの特別な性格をもっていたわけではないことわり、単なる反動的・権威主義的な政治体制とファシズムを区別している。つまり、彼によれば、ポーランドのピウスツキーの軍事独裁、ユーゴスラヴィアの君主的・軍事的絶対主義等は、古い型の専制体制であり、ファシズムとは言えない。それにたいして、ファシズムは、独自の国民的な大衆運動から生じたのであり、さしあたりイタリアとドイツで勝利した。オーストリアのファシズムは、ドイツとイタリアの模倣である。「実際にファシズムは、ここでは、本源的な大衆運動の産物ではなく、合法的国家権力が国民に押しつけた人工物である。」(S.157)独自の大衆運動としてのファシズムは、密接に絡んだ3つの社会的過程の結果である。

第一に、指導者原理を根本とし、固有の軍事的・反民主主義的・民族主義的イデオロギーを掲げる武装諸団体の形成。

第二に、戦後に貧困化した小ブルジョワと農民の広範な大衆の民主主義にたいする反攻。

第三に、労働者階級に対抗した資本家階級によるファシスト諸団体への援助と利用。

バウアーは、以下、これら3つの過程にそって、大衆運動としてのファシズム独自の運動がいかにかに形成され、ファシストがいかにかに政治権力を獲得したかを詳述している。

1. バウアーによれば、ファシスト党の萌芽は、戦後に退役した予備役将軍によって与えられた。彼らは、戦後に零落したが、戦時中の習慣を放棄することを望まず、私兵を形成して指揮し、これにユニフォームを着せ、行進させた。戦後期の政治的混乱は、これらの団体に威信を与え、発展する機会を与えた。この初期の運動のなかで、ファシズムの本源のイデオロギーが発展した。それは、ブルジョワ的な平和、民主主義、福祉、大衆の自治に反対し、これに対置されるべき好戦的、英雄主義的、指導者原理的な生活理念である。それは、軍国主義と民族主義を内容とし、典型的に小ブルジョワ的である。将校たちは、戦時とインフレ時代における特殊寄生的な諸資本を憎み、戦争利得者や闇商人を侮蔑し、これらにたいして反資本主義的感情をいだいた。さらにドイツでは、戦勝諸国の代理人に

見え、戦争から利益を引き出したプロレタリア社会主義に敵意をいだき、これにナショナル・ソーシャリズムを対置した。西欧のブルジョワ民主主義は、富裕な資本家の階級支配以外の何もかも意味しないようにみえた。「偉大なプロレタリア国」であるイタリアは、英、米、仏の資本家によって戦争の勝利の獲物をだましとられ、ドイツ国民は、西欧民主主義の背後に隠れ、ドイツ民主主義を道具に仕立てた国際的ユダヤ金融業者に貢納義務を押しつけられたと言われる。こうして、ファシズムのイデオロギーは、反民主主義の闘争を、国民大衆にはブルジョワ階級の階級支配にたいする闘争として、資本家にはプロレタリアートの平民支配にたいする闘争として、民族主義的知識人には外敵にたいするナショナリズムの闘争として主張するのである。(S.137ff)

バウアーは、以上のように、退役将軍および将校に指揮された武装諸団体がファシズムを芽生えさせ、固有のイデオロギーを生み出したと主張する。そして、本来のファシズム・イデオロギーの担い手であったこの「軍事的突撃隊」は、広範な大衆を服従させ、その指導下におくことに成功した場合にのみ力を得ると述べている。(S.139)

2. バウアーによれば、最初にファシズム・イデオロギーにとらわれた社会階層は、知識人であった。知識人は、民主主義の中に、隠ぺいされた寡頭政治を見いだす一方で、無教養で粗野な大衆の支配を見た。戦争と経済恐慌によって失望にかられた知識人は、政府に席を占めているプロレタリアートの成り上がり者を憎み、プロレタリアートが社会政策的諸成果を得たのに反発した。彼らは、何よりも民族の誇りが毀損されたと憤り、ナショナリズムに駆り立てられ、この立場からも民主主義に反対した。ドイツでは、革命が背後から一突きしたせいで、戦争に負けたという伝説が生まれた。結局、民族主義的知識人は、軍国主義的・ファシスト的・国粋主義的突撃隊と小ブルジョワおよび農民大衆との間を取りもつ仲介者になった。しかし、広範な小ブルジョワおよび農民大衆が、伝統のあるブルジョワ的・民主主義的大衆諸政党から離反し、ファシズムに加わるためには、深刻な経済的・社会的動揺をへる必要があった。(S.139ff)

バウアーによれば、ファシズムが広範な小ブルジョワおよび農民大衆を獲得するきっかけとなったのは、戦後、参戦国を襲った激しいインフレーションによる彼らの貧困化であった。零落したこれら小ブルジョワ大衆は、他方では労働者階級の賃金闘争の成功を目撃し、闇商人の活動を目撃した。彼らは、こうして、インフレ利得者である闇商人を憎悪し、さらに造反的な労働者層を憎悪した。他方、議会は、互いに口論する諸政党に分かれ、安定した強力な政府を形成できず、懸案問題を何ら解決できなかった。イタリアでは、その結果、多くの小ブルジョワ大衆が民主主義から離反した。プロレタリアートに服従を強いるため、階級闘争と諸政党の不毛の口論を終わらせ、国民経済を再建するために、鉄の意志をもつ指導者が求められた。

一方、——バウアーが続けて言うには——ドイツでも、インフレ時代にファシスト的・

国粹主義的な運動が高まりを見せた。しかし、当時ブルジョワ民主主義は、まだファシズムの攻撃を防ぐことができた。ドイツのブルジョワと農民は、マルクを安定させるために、西欧の資本主義諸列強の援助を必要とし、戦争の賠償をめぐって彼らと協調しなければならず、何よりも企業の再建のために外国からの信用供与を必要とした。そのため彼らは、当時、民族主義的・ファシスト的冒険を望まなかった。その結果、マルクの安定後、外国信用の流入を背景にドイツ経済が回復していった時代には、ファシスト的・国粹主義的潮流は、急速に退潮していった。この時代には、ヒトラーのナチス党は、とるに足らない泡沫政党であった。しかし、1929年に恐慌が勃発したとき、国粹主義的ファシズムは、新たに蘇った。民主主義は、小ブルジョワと農民を貧困化から守ることができなかった。また、民主主義諸政党は、貧困化した大衆を助けることができなかった。こうして、小ブルジョワと農民は、民主主義から離反し、ナチズムへと流れていった。(S.141f)

バウアーは、以上、ファシズムが小ブルジョワおよび農民大衆を獲得するためには、インフレ、恐慌と続いた資本主義の経済的危機が必要であったと説明する。つまり、貧困化し、零落したこれらの大衆が、彼らの利益を守りえない民主主義と民主主義諸政党から離反し、ファシズムへと流入する必要があったという。バウアーによれば、ファシズムは、イタリアとドイツで、戦間期のいくつかの恵まれた条件——戦争、戦後処理の混乱、経済的危機（インフレ、恐慌）——のもとに、国粹主義的・反民主主義的武装団体から始まり、知識人、小ブルジョワ、農民大衆を包括する独自の運動に発展していったのである。しかし、ファシストが政治権力を掌握するためには、それだけでは十分ではない。バウアーは、この点、資本家階級が労働者階級を屈服させるためにファシズムを利用した限りでのみ、ファシストが政治権力を獲得しえたと述べている。(S.142f)

3.バウアーによれば、イタリアでは、戦争直後の時期に、大土地所有者にたいして借地農、小作農民、日雇いの激しい造反運動が巻き起こり、農業制度を変革していった。政府が大土地所有者を助けなかったので、大土地所有者は自衛を講じざるをえなかった。1921年に彼らは、ファッショに助けを求め、その懲罰的遠征によって農業プロレタリアートの力を打ち砕いた。この例は、都市ブルジョワジーによっても利用された。

資本家は、——バウアーが続けて述べるには——労働者階級の突撃を防ぎ、これを敗北させる道具としてファシスト諸団体を見だし、これに資金援助をおこなった。そして、国家権力がファシストの運動を支持するように配慮した。ファシストは、軍隊の武器庫から武器を獲得しえた。労働者にたいするファシストの懲罰的遠征に際しては、警察が、労働者の指導者を逮捕したり、武器押収をおこなったり、ファシストを側面から援助した。国家権力による支持のおかげで、ファシズムは、大衆を容易に獲得した。黒シャツを着たものは罰せられなかった。また、ブルジョワジーからの資金援助によって、彼らに給料が支払われた。こうして、ファシスト武装団体は、すべての階級の階級脱落者の坩堝になっ

た。そして、そのうち、ブルジョワジーの単なる道具にとどまるにはあまりに強力になるにいたった。ブルジョワジーは、その結果、議会における自分らの政治的代表を見捨て、ファシストに国家権力を譲り渡す道を選ばざるをえなかった。資本と労働の階級闘争のなかで、最初のうちはブルジョワジーがファシスト暴力団体を道具として利用したが、このファシストたちは、プロレタリアートを屈服させた後、ブルジョワジーの政治的代表者たちをも議会と政府から追放し、ブルジョワ諸政党を解体し、諸階級の上に暴力支配を樹立するにいたったようにみえる。(S.143)

パウアーは、このように、イタリアでブルジョワジーの資金援助、国家権力による支持がファシスト武装団体を強化し、大衆運動として発展させ、道具として利用するといったブルジョワジーの当初の思惑をこえて、ファシストたちに国家権力を獲得させるにいたった事実を確認している。彼は、この歴史がドイツで繰り返されたと指摘し、続いてドイツの歴史的経過を述べている。

つまり、ドイツで民族主義的ファシズムは、すでにインフレとルール闘争の時期(1923年)にブルジョワジーと国家権力によって奨励され、援助を受けていた。しかし、ブルジョワジーは、賠償支払いと経済再建の必要から外国との協調政策をとったとき、ファシズム運動への援助を停止した。また、経済の繁栄期には、民主主義的ブルジョワ諸政党を支持したのであり、その結果ナチズムの運動は後退していった。1929年の恐慌後、ナチズムの運動が貧困化した小ブルジョワ・農民大衆を獲得するにいたったときにあらためて、ユンカーと資本家は、ナチスの中に労働者階級を撃退する手段を見だし、ナチスに巨額の支援資金を与えた。国防軍、官僚、裁判官は、ナチスの勢力増大がマルクス主義者を驚愕させたことで満足し、ナチスにたいする国家の待遇を改善した。ところで資本家階級とユンカー階級は、ナチストには決してならなかった。むしろ、彼らは、ナチストを侮蔑していたのであり、労働者階級の抵抗を破るためにファシズムを利用したのにすぎなかった。ところが、ドイツでもファシズムは、資本家階級の当初の思惑をこえて成長した。ドイツでもユンカーと資本家は、ファシズムに国家権力を引き渡すかどうかの選択を迫られた。ドイツでもブルジョワ諸政党の代表者は、政府のなかでファシストを飼い慣らすことができると信じて、ファシスト政府に参加した。しかし、イタリアにおけるより機敏にドイツ・ファシストは、政府からブルジョワ諸政党を追い出し、組織的に解体し、全体主義的独裁を設立するために、国家権力を利用した。ドイツでも、階級闘争は、ファシスト暴力団体がすべての階級の上に支配を樹立するに終わったかのようにみえる。(S.143ff)

以上、パウアーは、大衆運動としてのファシズムの独自の運動がいかに芽生え、発展し、ついには政治権力を掌握するにいたったかを説明する。パウアーによれば、ファシズムは、じつにさまざまな要因から発展していったといえる。戦争と敗戦は、反民主主義とナショナリズムを唱え、指導者原理からなる原ファシズムの武装諸団体を生んだ。戦後のインフ

レと経済恐慌は、貧困化した小ブルジョワ・農民大衆をファシズムへと突き動かし、ファシズムの大衆的基盤を形成した。労働者階級との闘争の必要から、ブルジョワジーはファシズムに資金援助と国家的援助を与え、こうしてファシズムを強化した。これら3つの社会的過程が絡まって初めて、ファシズムは大衆運動として発展し、国家権力を掌握できたのである。

バウアーは、既述のように、独自の大衆運動として発展したことに、単なる軍事独裁とか権威主義体制とは異なるファシズムの固有の特徴を見だし、この点でドイツとイタリアのファシズムにその典型を認めた。そして、オーストリアにおける上からのファシズム（オーストロ・ファシズム）が、ドイツとイタリアの経験を模倣したものの、独自の大衆基盤をもちえなかったことに注意を促し、この点でその脆弱性を認めたのである。このように『二つの大戦の間?』でバウアーがファシズムの大衆運動的側面を重視したことを考えると、山口定氏が、この側面を切り落とし、ボナパルティズム論の側面に限って、この著書におけるバウアーのファシズム論を紹介したのは片手落ちであったといえよう。

(2) 「階級諸力の均衡」論

『二つの大戦の間?』でバウアーは、独自な大衆運動としてのファシズムの展開を論じた後に、「ファシスト独裁は階級諸力の固有の均衡の結果として生ずる」(S.148)と述べ、ボナパルティズム論の観点からファシズムを論じている。注目すべきことに、その際、バウアーは、1920年代における彼の考えとは異なるユニークな見解を示している。

これまで、バウアーは、労働者階級がその政治的力量を強め、ついには労働者階級も資本家階級も単独で統治することができない局面つまり「階級諸力の均衡」状態が生ずるであろうという歴史的展望を繰り返し述べてきた。つまり、「階級諸力の均衡」は、労働者階級の政治的力量の強化の一定局面に生ずると主張してきたのである。ところが、彼は、『二つの大戦の間?』ではこう述べている。

ファシズムは、ブルジョワジーがプロレタリア革命によって脅かされた時点で勝利したのではない。ファシズムは、恐慌によってプロレタリアートがすでに弱められ、防衛にかられ、革命の波が衰えたときに勝利したのである。演説の上での革命主義は、空元気にすぎず、あまり害がなく、単なる法的な取り締まりの対象をなすにすぎなかった（コミュニストを意識しての発言）。資本家階級と大土地所有者がファシスト暴力団体に国家権力を引き渡したのは、賃金を引き下げ、労働者階級の社会的諸成果を破壊し、労働組合と労働者階級の政治的諸力を粉砕するため、要するに改良主義的社会主義の諸成果を破壊するためであった。(S.147f)

バウアーは、ここでは、恐慌によって労働者の力が弱体化した事実を指摘している。現

実における経済的・政治的な力は、資本家階級の方が圧倒的に強い。したがって、パウアーがこれまで述べてきた本来の意味での「階級諸力の均衡」状態は存在しない。それにもかかわらず、パウアーはなぜここで「階級諸力の均衡」という言葉にこだわるのだろうか？

この点、パウアーに即してもう少し検討すると、資本家階級がファシズムに権力を引き渡した直接の理由は、恐慌によって彼らの利潤が危機に陥ったことにあった。資本家階級は、経済の繁栄期には、社会保障、福祉、労働諸条件の改善など労働者階級にたいする譲歩を甘受しえた。ところが、恐慌は、利潤率の甚だしい低下をまねき、利潤の回復を望む資本家階級にとって、これらの譲歩が耐えがたい負担となった。資本家階級は、これらの譲歩を解消したいのだが、民主主義的諸制度がその障害となる。民主主義においては、資本家階級は、精神的イデオロギー的手段によって選挙民の支持を獲得しなければならない。しかし、この制度のもとでは、改良主義的社会主義と労働組合は資本家階級の攻撃にたいしてなおも強い抵抗力をもつ。その結果、民主主義を前提にしては、利潤回復を望む資本家の意思は思うようには貫けない。(S.147ff)

つまりパウアーは、自らの利潤利害を貫徹する上で民主主義的諸制度を前提にしては資本家階級の力が十分に強いとはいえないこと、弱体化したとはいえ改良主義的社会主義がなおも強い抵抗力を保持していることを強調している。彼によれば、労働者階級と資本家階級の両階級の「均衡あるいはむしろ弱さの結果」(S.149)、ファシズムの勝利が生じた。パウアーは、この「力の弱さの均衡」について、結論的にこう述べている。

「早期資本主義期の絶対主義とボナパルティズムのように...新たなファシスト的絶対主義は、一時的階級均衡状態の結果である。この均衡状態では旧来の法的手段でもってブルジョワジーはプロレタリアートに自分の意思を押しつけることができず、またプロレタリアートもブルジョワジーの支配から自らを解放しえない。そこで資本家階級はプロレタリアートにたいして暴力団体を使用したのだが、その内に自分自身もその独裁に服従しなければならなくなってしまう、両階級は、結局、暴力団体の独裁下に陥ってしまったのである。」(S.149)

繰り返し確認しておく、2つの階級の「力の弱さの均衡」というパウアーの考えは、一方で恐慌による失業の増大の結果として組織労働運動が弱体化し、他方で議会制民主主義の下で支持者の離反によってブルジョワ諸政党が統治危機に陥り、資本家階級が利潤危機に陥ったという現実を反映している。これは、一言でいえば、恐慌の結果としてこれまでの資本主義の経済体制と政治体制の正統性が危機に陥った事実を意味している。パウアーは、この点、民主主義にたいする小ブルジョワ・農民大衆の反攻のなかで、「資本家階級が、資本主義的社会秩序に根ざした旧来の理念体系で自らの支配をもはや維持できず、国民にたいする精神的影響力で利害を貫くことができ」(S.135)なくなったことを強調している。パウアーの「弱者の均衡」論は、この現実を内容としている限りで、そう的はずれとはい

えない。むしろこの現実の不正確な表現であったように思える。山口定氏は、バウアーのこの見解に注目し、次のようなコメントを与えている。

「...ここで印象深く強調されているのは、彼の具体的な表現とは反対に、むしろ、ブルジョワジーを『暴力』による反撃をやむなくさせるところまで追いこんだ『改良主義』的労働運動の『強さ』なのである。バウアーはいう、『資本金階級と大地所有者がファシストの暴力集団に国家権力を引渡したのは...改良的社会主義の獲得物を粉碎するためである。』バウアーの『階級均衡』論は、とくにこの点で、コミンテルンのファシズム論においても、またそこから異端として追放されたタールハイマーのファシズム論においてもなお充分には認識されていなかった重大な指摘をしていることになる。しかし、彼がその『階級均衡』論に、コミンテルンの指導下の労働運動を組みこんでいないのは、やはり一面的といわざるをえない。」(山口定前掲書、137-138頁)

山口氏は、ここで、バウアーが、利潤の利害から、労働運動の社会的諸成果の破壊を目指して、ブルジョワジーが「強い」改良主義的労働運動を暴力によって屈服させようとしたところにファシズム独裁の樹立の原因を見いだしたことを高く評価している。ただ、細かいことにこだわるならば、他方で山口氏は、労働者階級の弱体化に関するバウアーの発言と「改良主義」的労働運動の「強さ」に関する彼の発言との間に矛盾をみているようだが、これは当たらない。バウアーがここで言う「改良主義」的労働運動の「強さ」は、恐慌による弱体化のなかで、なおも民主主義の下では資本金階級に勝手なことをさせないほどの力を保持しているという意味での相対的な強さなのである。また、ファシズム論にバウアーがコミンテルン指導下の労働運動を組みこんでいないのは一面的という山口氏の批判も、バウアーの真意を伝えていない。バウアーは、革命主義とか革命的社会主義のなかに共産主義を含めていた。彼は、共産主義による労働運動の分裂には反対であり、むしろ労働運動の分裂がドイツでナチズムの勝利をもたらしたと考えている。バウアーは、共産主義の革命宣伝が当時左翼的な空気をなすにすぎず、現実には革命は問題たりえず、したがってブルジョワジーの側もこれを法的な取り締まりの対象としたにすぎないと主張している。このような認識のもとに、バウアーは、ファシズムの主敵が改良主義的労働運動にあったとみなしている。バウアーは、ファシズム論において共産主義運動の意義を見落としたのではない。むしろ、彼の考えのなかに共産主義運動にたいする社会民主主義的な独自の判断が貫いていたことに留意すべきであろう。

さて、山口氏は、「弱者の均衡」論に注目したとき、独自の大衆運動としてのファシズムに関するバウアーの説明を無視した結果、その深い意味を見落としているようにみえる。つまりバウアーは、ここで、独自の大衆運動として発展した「第三の勢力」としてファシズムに注目しているのである。バウアーによれば、ブルジョワジーは、労働者階級の攻撃の武器としてファシズムを利用しようとし、そのためにファシズムに資金援助と国家的支

持を与えた。ファシズムは、ブルジョワジーのこの支援によって強大化し、政治権力を獲得しえた。とはいえ、ファシズムは、小ブルジョワ・農民大衆を結集した大衆運動として独自の勢力をなしていた。ブルジョワジーは、ファシストたちを侮蔑していたのであって、彼らに補完的な役割を期待していただけで、本来は政治権力を引き渡すつもりはなかった。ところが、ファシズムは、ブルジョワジーの思惑を越えて成長し、ついにはブルジョワジーの本来の意思に反して政治権力を獲得するにいたった。ファシズムは、「第三の勢力」として、労働者階級と資本家階級の「弱者の均衡」につけこみ、政治権力を獲得するにいたった。パウアーには、このようにファシズムの独自の運動を強調する側面があった。この側面は、ファシズムの政治体制を分析するとき重要な意味をもってくる。

(3) ファシズムの政治体制の権力的性格

パウアーは、「第三の勢力」として登場したファシズムの独裁の政治的性格についてこう述べている。

「確かにファシスト独裁は、さしあたって、ブルジョワ民主主義の政府権力よりも、資本家階級にたいして自立的・自己支配的であり、資本家階級よりも強いように思われる。ファシストのテロルは、資本家をも脅かす。ファシスト独裁は、資本家の諸組織をも解体するか、その後見下におく。ファシスト独裁は、資本の新聞をも従属させる。それは、資本家の機関紙を政府の機関紙に転化し、そのことによって国民大衆に影響をなす上でのもっとも重要な手段の自立的支配を資本から奪った。しかし、ファシスト独裁は、資本家階級をも支配するにしても、それにもかかわらず資本家階級の欲求・利害・意思の執行機関に不可避的になっていく。」(S.149)

つまり、パウアーは、ファシスト独裁が「資本家階級をも支配する」ことを認めた上で、資本家階級の利害を貫徹する執行機関となることを強調するのである。すなわち、大土地所有者と大資本家は、ファシスト独裁下でも経済を支配し、この経済を支配する力によって直接的に独裁者に影響力を行使する。ファシズム体制が資本主義を止揚するものでないかぎり、独裁者は、資本主義の経済的利害を貫徹する役割を担わされる。この点、ブルジョワ民主主義のもとでは、大資本の指導下にあるとはいえ、全ブルジョワジーが政党をとおして政治的に支配した。それにたいして、ファシスト独裁下では、大資本と大土地所有が支配する。

その際、パウアーによれば、権力をめぐって闘争している時期には、ファシズムは、資本主義に反攻する気分に満たされた小ブルジョワ・農民大衆に支えられていた。しかし、ひとたび権力を獲得すると、ファシズムは、資本主義の社会諸権力の影響下に陥り、自分の支持者の間にある小ブルジョワ的・空想的ラディカリズムを抑え込まなければならなかつ

た。これは、ファシスト党内の激しい分派闘争を生んだ。独裁者は、イタリアでは、第二のローマ進軍を叫ぶ黒シャツ隊などの小ブルジョワ的反乱を、党からの除名や下部指導者の交代等によって抑え、ドイツでは、第二革命を叫ぶSAの小ブルジョワ的反乱を殺戮(1934年6月30日)によって鎮圧した。その結果、ファシズムの間で小ブルジョワ階級が力を失った。すでに労働者組織の破壊と労働者階級の無力化がなされている。このような経過をへて全体主義的な、したがって無制限な階級支配が登場した。「ファシズム反革命は、したがって、民主主義的諸制度によって制限された全ブルジョワジーの階級支配から、大資本家と大土地所有者の無制限な独裁への移行を意味する。」こうして、諸階級の一時的均衡は止揚されるにいたる。(S.152f)

バウアーは、このように、小ブルジョワ・農民の大衆運動として独自に発展したファシズムが、諸階級の一時的均衡に乗じて政治権力を獲得した後、大資本家と大土地所有者の無制限な独裁に転化していったと説明する。ファシズムが大資本家と大土地所有者の独裁体制に転化した理由は、社会秩序が国家権力のあり方を規定するということにある。経済が資本によって支配されている限り、資本の経済的権力は、どんな国家権力をも自己に従属させるのである。もちろん、この事実は、大資本家と大土地所有が政治的統治カーストをなすファシストを自らに従属させるということの意味するのではない。むしろ、政治的統治カーストであるファシストと経済の支配者である大資本家および大土地所有者が、それぞれの領分において共同して社会を支配すると考えなければならない。その際、ファシスト独裁において、政治的統治カーストと(経済的)支配階級がいつも一致するわけではない。ファシスト独裁下では、(経済的)支配階級と政治的統治カーストとの間で、一時的に緊張、対立、紛争が生ずる。この対立は、ファシスト独裁の初期にはとりわけ険しかったが、ファシズムが自己の隊列内のユートピア的・小ブルジョワ的ラディカリズムを克服した後では緩和される。けれども対立はつねに新たに生ずる。ファシズムの経済は、日々、あれこれの支配的資本家階級の利害を損ね、その結果、統治カーストは、経済的決定を行なうにあたって、支配的資本家階級の諸フラクションと対立に陥らざるをえない。

バウアーは、以上のように、ファシスト独裁下での政治的統治カーストと(経済的)支配階級との対立・緊張関係の存在を指摘する。そして、ファシズム独裁の支持基盤が、初期の広範な国民大衆から、資本家階級の好戦的フラクションへと狭められていくことを強調する。というのは、バウアーによれば、ファシズムの好戦的民族的對外政策が、資本にも重い費用負担を課し、さらには、全精神生活の全体主義的支配への要求が、ブルジョワジーの多くの層の伝統とイデオロギーと矛盾に陥り、こうして支配的資本家階級の多くのグループが政治的統治カーストから離反するからである。

ところで、バウアーは、ファシスト独裁下での政治的統治カーストと(経済的)支配階級における対立・不一致の存在を強調するとき、資本主義のこれまでの国家秩序における

両者の対立・不一致と同列にこれを置くかのような発言を行なっている。つまりリベラルな国家の時代には、支配的資本家階級は、多くの国でリベラルな土地貴族や官職貴族に統治業務を任せた。ブルジョワ民主主義においては、ブルジョワジーは、ブルジョワ諸大衆政党の職業政治家を介して支配した。「資本家階級は、政府にその利害の完全実施を要求する。ブルジョワ的・農民的大衆政党からなり、彼らに支えられている政府は、政府与党の選挙民層を構成する諸階級の利害と感情を配慮しなければならない。」その結果、支配的資本家階級とその政治的代理人は、階級支配を脅かさない範囲で対立に陥り、一定の敵対関係に陥る。(S.127)

バウアーは、この事実を確認して、ブルジョワ民主主義において支配的資本家階級と職業的政治家との対立・不一致があるように、ファシスト独裁下でも（経済的）支配階級と政治的統治カーストとの対立・不一致が存在すると説いている。バウアーのこの見解にたいして、山口定氏は、次のように論評している。

「...<バウアーが>『執行権力の自立化』のテーゼを事実上『統治カースト』と『支配階級』の非同一性一般の指摘に解消してしまったことは、——マルクス主義国家論一般としては一定の前進を意味するとはいえ——...彼のファシズム国家論を平板なものにしていることもいなめない。」(同氏前掲書、159頁)

ここで山口氏は、バウアーが「執行権力の自立化」の問題に十分に考慮を払っていないと批判している。ちなみにタールハイマーの所説を取り上げつつ氏が述べる「執行権力の自立化」とは、第一に、ブルジョワジーも政治的支配からの排除を甘受することを意味する。第二に、執行権力が「立法府もしくは議会による拘束をふり捨てて」「完全な政策決定権を掌握するという点にある」。第三に、「『執行権力の装置』が『あらゆる階級からの落伍分子、あらゆる階級の寄生者』を吸収して『途方もない膨張』をすることによって支えられている」ことを意味する。氏は、これら3点における「執行権力の自立化」のうち、バウアーが、とりわけ第二と第三の点を「取り逃がした」と批判する。

山口氏のこのバウアー批判は、はたして妥当なものだろうか？バウアーは、ファシズムの意味が、労働者階級の諸市民権を奪うだけでなく、ブルジョワ諸政党をも解散させ、国民全体の意思から独立した無制限の暴力の支配体制であると特徴づけている。それは、民主主義的諸制度に制限された階級支配に代わる、全体主義的な無制限の階級支配である。それは、暴力団体の独裁である。そして、この暴力団体は、軍国主義的民族主義的な軍人の運動から出発し、あらゆる階級落伍者を包括した、指導者原理によってなりたつ団体である。バウアーのこの理解は、山口氏のいう「執行権力の自立化」の第二、第三の点に相当しないだろうか？この点、バウアーが別の機会に述べた、民主主義と独裁におけるブルジョワジーの支配の相違に関する次の発言をも考慮する必要がある。

「民主主義における資本家階級の支配は、まさに資本家階級の無制限な支配ではない。

ポリシェヴィキがなし、多くの社会民主党者がこれを真似ているように、どんな階級支配をも一階級の独裁とみなすとすれば、個々の国家形態の歴史的特殊性を認識することを自ら不可能にする。」¹⁾

われわれは、バウアーが、ブルジョワ民主主義下とファシズム下での政治的統治者と資本家階級の非同一性と不一致を並列して述べたとしても、両者を混同したわけではないことをここで確認しなければならない。バウアーによれば、ブルジョワ民主主義下では、非同一性と不一致は、職業的政治家からなる政府が、小ブルジョワ・農民大衆の利害等を考慮せねばならず、ひいては国民全体の利害を形式的に主張しなければならないことから生ずる。ファシズム支配下では、非同一性と不一致は、資本家階級が、当初の自分の意に反してブルジョワ諸政党を見捨て、小ブルジョワ的・農民的大衆運動によって発展した軍国主義的・民族主義的暴力団体組織に政治的権力を委ねなければならなかったことから生ずる。また統治カーストの政策が、その時々資本家グループの特殊利害と衝突することから生ずる。バウアーは、この点を明確に意識し、さらにファシズムの支配体制が、議会的立法団体に制約されない無制限の暴力独裁であることを強調している。山口氏の言うように、バウアーが「『執行権力の自立化』のテーゼを事実上『統治カースト』と『支配階級』の非同一性一般の指摘に解消してしまった」とは、どうみても解釈できない。

1) Otto Bauer, *Kapitalsherrschaft in der Demokratie*, in: *WA.*, Bd. 9, S. 208.

(4) 小 括

以上、『二つの大戦の間?』によりつつ、バウアーのファシズム論を紹介し、検討してきた。バウアーのファシズム論の特徴は、何よりも、小ブルジョワ・農民大衆を核とした独自の大衆運動としてファシズムをとらえたことに見いだされる。この点をいかにバウアーが重視していたかは、大衆運動を基盤とするかいなかで、ファシズムと単なる権威主義的軍事的独裁体制とを区別していることからうかがわれる。彼によれば、ファシスト団体は、その政治的力の弱体化をみせた資本家階級と労働者階級の均衡（弱者の均衡）に乗じて権力を掌握した第三の勢力をなす。ファシズムは、資本家階級の資金補助や支援を受けて成長したが、その政治的利用を試みた資本家階級の思惑を越えて成長した独自の大衆運動である。資本家階級は、結局、やむを得ずファシスト団体に政治権力を委ね、ブルジョワ民主主義諸政党の解散を甘受しなければならなかった。バウアーは、ファシズムの独自な大衆運動としての側面を認識していたからこそ、ファシズムの政府権力が、資本家階級を含めて諸階級の上にあたかも立つかのように見える述べたのである。実際に、バウアーによれば、当初は、「ファシスト独裁は、ブルジョワ民主主義の政府権力よりも資本家階級にたいして自立的自己支配的であり、資本家階級よりも強いように思われた。」「ファシスト

独裁は資本家階級をも支配する……」しかし、ファシスト独裁は、資本主義を止揚するものでないかぎり、経済を支配する大資本家と大土地所有者の利害を代弁せざるをえず、その国家機関は、大資本家らの執行機関としての役割を果たさざるをえない。こうして、ファシスト独裁は、大資本家と大土地所有者の無制限の階級支配をなすにいたる。『二つの大戦の間?』では、パウアーは、結局、政治的統治カーストであるファシストと支配的資本家階級との非同一性・不一致に留意しつつも、大資本家と大土地所有者の無制限の階級支配の体制としてのファシズムを強調するところで終わっている。ここでは、まだ、ファシズム独自の政治経済体制の立ち上がった分析がみられない。パウアーは、ファシズム独自の政治経済体制の分析を、後に「ファシズム」という論稿で行なっている。

III バウアー最後のファシズム論

パウアーは、その生涯の最後の日々、ファシズムを総合的に論じた小冊子の作成に取り組んでいた。しかし、1938年7月5日、突然彼を襲った死は、その完成を妨げた。パウアーの未完の遺稿は、同年7月16日、『社会主義闘争』(Der Sozialistische Kampf) 誌に「ファシズム」というタイトルのもとに発表された。¹⁾未完の論稿であるとはいえ、それは、パウアーのファシズム論の最後の到達点を示すものである。以下、この論稿を詳しく紹介することにしたい。

まず「ファシズム」という論稿の特徴を大まかに確認しておく、注目すべきことに、ここでパウアーは、「階級諸力の均衡」という言葉を使用していない。もちろん、その理由として、論稿が未完であるという事情、さらにファシズムの成立過程よりはファシズムの政治的経済的支配体制の制度的な仕組みを重点的に明らかにするのを課題としたことが考慮される。しかし、もしも「階級諸力の均衡」をファシズムを理解する上でのキーワードとみなしているならば、パウアーは、いかなる理由があろうと、この言葉にまったく触れないということは考えられない。このことは、パウアーのファシズム論において、「階級諸力の均衡」という観点があまり重要な位置を占めなくなっていた事実を暗示している。翻ってみると、『二つの大戦の間?』のなかでも、「階級諸力の均衡」論は、前節の考察からうかがわれるように、「弱者の均衡論」としてパウアーのこれまでの考えにたいしてかなりの「変質」を示していた。パウアーのファシズム論をあくまでも「階級諸力の均衡」論の範囲内で整理する山口定氏の努力とは裏腹に、1930年代パウアーのファシズム論は、「階級諸力の均衡」論の範囲で納まらない豊富な内容をもつにいたり、そのなかで「階級諸力の均衡」論自体もしだいにマイナーな位置づけしかもたなくなっていたと考えられる。

論稿の第二の特徴は、帝国主義との関連でファシズムの問題を論じていることにある。パウアーは、この点、「世界戦争からファシズムへ」という節で、次のように述べている。

第一次大戦後、ドイツの犠牲の上に、イギリス帝国主義とフランス帝国主義の要求にしたがって世界体制が構築された。両帝国主義は、1919年の講和諸条約によって戦争目標を達成し、満ち足りた帝国主義をなすにいたり、したがって保守的で平和主義的である。それにたいしてイタリアとドイツは、世界の再分割を求める「攻撃的・好戦的帝国主義」をなす。こうして満ち足りた帝国主義諸国と不満をもつ攻撃的帝国主義諸国との対立が生ずる。ファシズムはさしあたってイタリアとドイツで勝利した。ファシズムは、一面では、戦後の革命過程を通して激化した階級対立の所産であるが、他面では、世界再分割を求める攻撃的帝国主義の手段である。

バウアーは、このように、攻撃的・好戦的帝国主義の手段として、ファシズムを特徴づけている。ファシズムは、攻撃的・好戦的帝国主義の手段として、戦争目的のために経済と政治を再組織し、新たな国家・経済・労働制度を生みだす。論稿「ファシズム」は、これらの制度を逐次分析している。²⁾

1) Otto Bauer, *Der Faschismus*, (*Der Sozialistische Kampf*, 1938), in: *WA.*, Bd.9. 以下、引用等の出所については、本文中にページ数のみを示すことにする。

2) 山口定氏は、バウアーによる帝国主義論の視点からのファシズム論に立ち入るためには、「ヒルファディングを含むオーストロ・マルクス主義の帝国主義論を正面から検討しなければならない」という理由から、本論文を検討することを断念している（同氏前掲書、160頁以下）。

(1) ファシズムの国家・経済・労働制度

1. まず「ファシズム国家」という節で、バウアーは、資本主義の老齢期に、ブルジョワジーが、民主主義のもとで精神的手段によって国民大衆を指導する力に確信をもてなくなったので、「全体主義的絶対主義」に立ち戻ったと述べている。つまり、ファシズムは、ある意味で、資本主義初期の絶対主義への先祖返りであったという。バウアーによれば、ファシズムは、資本主義の経済的危機それに民主主義の危機の所産であった。深刻な経済恐慌は、民主主義を通じたブルジョワジーの統治の危機を招いた。つまり、恐慌によって貧困化した国民大衆は、反資本主義的気分に満たされ、また自分たちを貧困から守りえないブルジョワ民主主義に反攻した。資本主義的ブルジョワジーは、もはや民主主義を介して政治的に支配しえないので、民主主義に反対し、これを破壊するために、小ブルジョワ大衆のファシズム的反攻を利用し、ファシズム独裁を樹立するにいたった。ブルジョワジーは、こうして、かつて絶対主義と封建制と戦ったときに掲げた、権利保障、自由、人間性、人間の尊厳の旗を降ろすにいたった。そして、国民のすべての自決権に反対し、ドーチェ、フューラーの全体主義的命権力として絶対主義を復活させるにいたった。(S.875f)

注目すべきことに、バウアーは、ここでは、民主主義における自己の統治危機に直面して、ブルジョワジーが、積極的に反民主主義の立場に移り、政治の避難所としてファシズ

ム独裁を求めたと述べている。この点、『二つの大戦の間?』では、ブルジョワジーは、労働者階級にたいする脅迫手段としてファシスト暴力団体を利用するつもりであったのであり、当初はこれに政治権力を引き渡す意図はなかったと説明している。ファシズム独裁の樹立は、予想に反して強大化したファシスト暴力団体に、ブルジョワジーが政治権力を委譲することを強いられる形で成立したという。ところが、論稿「ファシズム」では、この考えに関する言及はなく、ストレートにブルジョワジーがファシズム独裁の樹立を求めたと説明される。パウアーの見解がなぜ微妙に変化したかは確かめる術がない。あるいは、論稿「ファシズム」が、独自の大衆運動としてのファシズムひいてはファシズムの形成過程を立ち上げて論ぜず、もっぱら支配体制としてのファシズムの問題に焦点をあてて論じていることに関係しているのかも知れない。

2.『二つの大戦の間?』では、パウアーは、ファシズム独裁の体制が、大資本家と大土地所有の無制限の支配を保障するものであると強調している。しかし、彼は、ファシズムの経済体制の問題に立ち入って考察を加えていない。それにたいして、論稿「ファシズム」では、この点、比較的詳しい説明が加えられている。つまり、彼は、こう述べている。

第一次大戦中の「戦時社会主義」すなわち戦時統制経済は、今日ファシズム諸国で展開されている「国民社会主義」(nationaler Sozialismus)の範型をなしている。戦後資本家階級の自由志向によって国家による経済支配が解体されたが、まもなく経済にたいする国家の指揮体制の新たな諸傾向が生まれた。そして、1929年恐慌を契機に国家が経済生活に深く干渉するにいたった。この点、ファシズムは、国家による全体主義的支配にすべての階級を服させ、個々の特殊利害の抵抗に抗して経済の国家的規制を実施する。ファシズムでは、国家主義の完全な発展がみられる。ファシズム的国家主義は、国民社会主義と自らを特徴づけるが、実際には資本主義経済の本質を変えるものでなく、資本主義の新たな一発展局面を示すにすぎない。

パウアーは、このようにファシズムの経済体制が、資本主義の新たな一発展局面としての国家主義的経済をなしていると特徴づけている。その際、注目すべきことに、ファシズムの国家主義的経済の性格について、こう述べている。

これまでは、利潤率の自立的運動が資本主義経済を規制してきた。この運動は、ファシズム国家によって止揚された。どの産業部門に投資するかは、もはや個々の産業部門の利潤率の高さによってではなく、国家の命令によって決定される。一般的平均利潤率の変化ではなく、国家の意思が産業の新規投資の規模と景気を決定する。(S.879)

このように、パウアーは、ファシズム経済では、もはや個々の産業の利潤率の自立的運動ではなく、国家の意思と命令が経済を規制するのであり、したがって、そこには「国家によって管理された社会的規制」が生み出されていると指摘している。そして、ファシズム国家の発展の中に、利潤動機の運動に生産を委ねる資本主義的無政府性にたいする計画

的社会的組織の優越性が示されると強調している。つまり、ドイツの第三帝国において失業が急速に解消し、また、ファシズム独裁の命令下に新たな生産部門が飛躍的に発展している。バウアーは、この事実が、資本主義的市場経済にたいする計画経済の優越性を示すものであるととらえるのである。(S.879f)

バウアーは、以上の点を認めた上で、ファシズムの計画経済が軍事経済をなし、戦争の経済的準備を形成する事実に注意を促す。バウアーによれば、ファシズム経済では、生産諸力の発展は、軍備拡大に奉仕する。為替管理によって、輸入は、軍備拡大に役立つ原料に制限され、消費財産業の発展が抑制される。大衆の購買力は、生産の背後に深く取り残される。ファシズムの国家主義は、こうして別種の危機すなわち欠乏の危機を生み出す。すべての労働者が就業し、労働者階級が熱狂的に労働したとしても、この労働は、消費財の生産ではなく、軍需産業の拡大と戦争資材の生産に役立てられる。労働者階級にたいする搾取は激化する。軍備拡大を目的とするファシズム経済は、したがって固有の労働制度によって支えられる。

3.バウアーによれば、ファシズム国家では、労働者の自由移動は制限され、職業選択および契約の自由が一般原則として廃止される。労働者は、もはや労働力商品の自由な販売者でなく、国家の命令下に服する。賃金・労働諸条件は、官庁の命令によって決定される。その結果、8時間労働日は空洞化し、労働時間は延長し、合理化・労働強化が進められる。他方で、ファシズム国家は、賃金引き上げを禁止し、租税や社会保険の掛け金を引き上げ、こうして実質賃金は、引き下げられていく。ファシズムの労働制度は、結局、封建時代の農奴制度とのアナロジーでとらえることができる。その下では、封建時代の農奴が土地に縛られるように、企業家の農奴は経営に縛られる。

バウアーは、以上、ファシズムの国家主義経済が、資本主義の特徴をなす利潤の自立的運動と労働力商品の自由な売買を廃止し、官庁の命令下に労働諸条件を決定し、計画経済を実現し、軍備拡大にすべてを動員することによって攻撃的帝国主義の基礎をなすと説明している。バウアーによれば、ファシズムは、経済的軍備と同時に政治的軍備を進める。すなわち、軍備拡大と戦争に反対するすべての政党、社会的諸組織、精神的諸潮流を抑圧し、戦争のための暴力装置を築く。青年にたいして民族主義的・帝国主義的教育をほどこすことによって、全国民を民族主義的・帝国主義的に感化していく。そして、ファシズムは、民主主義諸国を守勢に迫りやり、外交的成功をおさめていく。バウアーは、しかし、この成果にもかかわらず、ファシズムが乗り越えがたい制限に突き当たると、次のように述べている。

近代的な軍備、防衛施設、高速道路の建設、軍需産業の移転、代替素材産業の形成が成就されると、ファシズムには次の選択しか残されない。ファシズム国家の拡大した社会経済装置とファシズムの労働制度によって深く沈んだ国民大衆の購買力との矛盾の結果、経

済恐慌に陥るか。それとも戦争を始めるか？

パウアーは、ファシズムには、将来、上記の2つの道しか残されておらず、結局、その攻撃的帝国主義が不可避的に戦争を招いていくと結論する。

パウアーは、この攻撃的帝国主義に関連して、ファシズムが、自国の労働運動と社会主義の宣伝を暴力的に弾圧することによって、マルクス主義とポリシェヴィズムにたいする前衛闘士として国際舞台に登場する事実注目する。ファシズムは、プロレタリア革命にたいする闘争を掲げることによって、自己の帝国主義的目標をカモフラージュする。それは、プロレタリア革命にたいする資本主義反革命の前衛闘士として全世界の資本家階級に自称することによって、ソ連やスペインなど労働者階級が前進を遂げているすべての国に反革命と侵略を宣言する。ベルリン、ローマ、東京といったファシズムのトライアングルは、かつてブルジョワ革命にたいして絶対主義的封建的秩序を守った神聖同盟に似ている。神聖同盟の打倒がブルジョワ階級の解放の前提であったように、ファシズムからの解放は、世界プロレタリアートの解放の前提である。

それでは、ファシズムからの解放の条件は、いかにして形成されるのか？パウアーは、論稿「ファシズム」の後半でこの問題を論じている。

(2) 反ファシズム闘争の展望

反ファシズム闘争の展望を描くにあたって、パウアーは、ファシズムが資本主義の危機の産物であり、この危機を深めていく事実を確認している。彼によれば、ファシズムは、2つの意味で資本主義の危機の産物である。第一に、ファシズムは、資本主義的ブルジョワジーが、もはや精神的手段、民主主義の形態で人民大衆の支持を獲得しえなくなったときに発生する。第二に、個々の資本家の利潤動機が経済の運営をリードできなくなり、経済が国家の社会的指導を必要とするときに初めて発生するのである。(S.888)

パウアーは、ファシズムが、国家権力を無制限の全体主義的権力に仕立て上げ、最高度の資本主義的搾取を実現し、プロレタリア的社会主義にたいする資本主義の完全な勝利を意味するものであっても、資本主義の危機の産物にすぎないことをまずは確認するのである。彼によれば、ファシズムは、戦争準備の経済に諸階級を動員することによって社会的緊張を生み出す一方で、世界経済の分業を後退させる。国家間の経済的・政治的対立を激化させ、不可避的に戦争を招いていき、こうして資本主義の危機を深刻化していく。

パウアーによれば、ファシズムは、他のどんな社会よりも革命的緊張に満ちた社会をもたらす。つまり、ファシスト独裁の国家は、私的所有の基礎の上に成り立つのであり、利潤を追求する私的所有者に生産手段を委ねる。が、他方では利潤動機ではなく、国家の直接的命令によって生産の運営を行なう。国家官僚は、個々の企業家層の特殊利害を戦争準

備の「全体的利害」に従属させることによって、個々の企業家層のその時々の特権利害と対立する。さらに、ファシズムは、労働者階級の生活利害と激しい対立状態に陥る。これらの頻繁な対立・紛争のなかに、経済過程の社会的運営と生産手段の私的所有との矛盾が表現されている。この内的矛盾は、独裁のテロ支配によって隠ぺいされているが、次の2つの方法による以外に解決されない。つまり、生産過程の社会的運営といった枷を爆破し、リベラルな資本主義段階に逆戻りするか、社会主義的経済組織に前進することによって私的所有という制限を打破するかの2つである。結局、矛盾の解決は、ファシスト国家主義を打破し、社会主義革命をもたらす歴史的革命的過程に見いだされる。(S.888f)

それでは、労働者階級は、ファシズムからの解放にいかにして向かうのであろうか？バウアーによれば、前述のように、ファシズムは、資本主義経済の重大な危機の産物であり、長期的な経済恐慌と大量の失業を背景にして権力の座についた。それは、軍備拡大の経済運営によって、失業を急速に押さえ込み、こうして労働者層の共感を獲得した。そして一方では、労働者組織を破壊し、反対宣伝をテロルで抑え、全労働者階級をその宣伝の影響下に置く。しかし、他方では、実質賃金の低下、労働時間の延長、企業家絶対主義への服従の強要、軍隊的な補助労働組織の強制は、労働者階級の怒りを強める。その抵抗は、経済の深刻な動揺、統治カーストの内的危機、戦争の時期に強まる。労働者の抵抗の武器としては、唯一ストライキのみが残されている。大衆ストライキともなると、ファシストの法律的禁止とかテロルも有効でなくなる。労働者階級の闘争は、ファシストの法律的禁止と衝突し、団結権を求める闘争に発展していく。この法律的禁止は、ファシスト的労働制度の基礎をなしており、その上でのみ戦備に必要な巨大な剰余価値量の搾取が可能となっている。したがって、労働者階級のどんな経済闘争も経済的国家主義とファシズムの政治独裁一般にたいする闘争に展開していく。(S.890ff)

バウアーは、続いて、ファシズムと資本家階級それに農民、小ブルジョワ階級との関係について考察する。まず、ファシズムと資本家階級との関係については、こうである。ファシスト反革命は、国家権力をファシスト党に与え、新たにファシスト官僚を生み出す。ファシスト官僚が統治カーストをなすとすれば、資本家階級は、依然としてその保護下に置かれた支配階級である。ファシスト官僚は、価格、利潤の高さ、投資配分を決定し、また個々の特殊利害を帝国主義的総利害に従属させることによって、依然として支配階級をなすあれこれの資本家グループの特殊利害と対立・矛盾する。資本家階級は、にもかかわらず、ファシスト的政治支配体制を打倒しえない。結局、資本家階級と政治カースト間の対立は、政治カースト内部の対立に移され、資本家階級と密接に結びついたファシスト党、国家および経済官僚の指導層における意見の相違と利害対立となって現れる。それは、ファシズムの内紛・動揺・組織解体化の傾向を生む。(S.893)

一方小ブルジョワ階級、農民、知識人についていえば、元々はこれらの反攻からファシ

ズムが生じた。だから、ファシストは、これらの諸階級を従属下につなぎとめるために、譲歩を行い、優遇措置をとる。しかし、ファシズムは、小ブルジョワと農民をその経済的強制に服させる。つまり、農民から自己の農産物の処分権を奪い、指定の機関に農産物を引き渡すことを強いる。また、手工業者にたいして必要とする原料の引渡しを拒否する。割当命令と所定の価格表に小売商人を服させる。さらに、知識人の精神生活を圧迫する。ファシスト官僚が、経済生活を厳しく規制すればするほど、これにたいする小ブルジョワ諸階級の抵抗も激しくなる。

バウアーは、小ブルジョワ階級の不満にたいするドイツ・ファシズムの対策をこう述べる。すなわち、効果的な対策は、反ユダヤ主義である。小ブルジョワ諸階級は、ユダヤ人の競争者と相対している。ファシズムは、ユダヤ人競争者からの解放を掲げることによって小ブルジョワ諸階級を体制支持につなぎとめる。しかし、ユダヤ人の根絶政策は、一時的にだけ小ブルジョワ諸階級を満足させるにすぎない。なぜなら、彼らは、ユダヤ人搾取者・競争者に代わって、ナチス搾取者・競争者が現れ、事態が何も変わっていないことに気づくからである。先に述べたように資本家階級の個々のセクトの争いがファシスト党の指導者たちの中に移されるとすれば、小ブルジョワ諸階級の反攻気分は、ファシスト党の党員大衆の中に移される。こうしてファシスト党の党員大衆は、ファシズムにたいする小ブルジョワ階級の反攻気分に影響されて、その初期の小ブルジョワ的社会主義の要求を再び強く掲げるようになる。(S.893f)

バウアーは、以上のように、ファシズム統治下における各階級の事情を説明する。彼は、これによって、ファシズムの支持基盤が狭められていく事実を指摘しようとした。ファシズムの支持基盤は、資本家階級と大土地所有者に狭められるが、この中でも内紛が存在する。戦争準備、帝国主義を目指すファシズムの社会的運営にたいして、個々の資本家グループの特殊利害が対立・矛盾に陥る。資本家グループの特殊利害をめぐる争いは、ファシスト党の指導層の中での争いに移される。その中で、ファシズムの支持基盤は、資本家階級と大土地所有者の好戦的分子に狭められていく。一方、ファシズムの大衆基盤をなした小ブルジョワ諸階級も、支配階級の側に立ったファシズムに幻滅し、反抗気分に満たされる。しかし、ファシスト国家権力にたいする闘争を主導するのは、労働者階級である。労働者階級の大衆ストライキがファシズム支配体制と国家主義的強制経済を揺るがして初めて、小ブルジョワ、農民、知識人の広い大衆は、この抵抗運動に加わり、ファシズムの打倒を試みるようになる。有産諸階級の不満がファシスト官僚の長老たちを不安と紛争に陥れ、その従属者たちにおける反抗気分を生み出し、そのことによって、人民の抵抗運動にたいしてファシスト的暴力装置の抵抗力が弱められるならば、.....

草稿は、ここで中断している。前述のように、バウアーは、その突然死によって、原稿を中断せざるをえなかったのである。

(3) 小 括

以上、バウアー最後のファシズム論を、バウアーの論述にそってできるだけ忠実に紹介してきた。ここで2つの点にしぼって簡単にコメントを付け加えておきたい。

第一に、バウアーは、ファシズム経済をかなり大胆に特徴づけている。つまり、それは、国家主義的経済ともいうべきものである。そこでは、利潤率の自律的運動が経済を律するのではなく、国家の命令が経済を律する。要するにバウアーは、ファシズムにおいては、国家とか政治が経済を規定すると主張していると考えられる。彼の友人であるヒルファディングは、ほぼ同じ時期に、この事実をとらえて、いわゆる唯物史観の再考を企てるまでにいたっている。バウアーの場合、そこに資本主義の無政府性にたいする計画経済の優越性を見だし、さらに、私的所有と生産過程の社会的運営との間の矛盾を見てとっている。つまり、エンゲルスのいう資本主義の「基本矛盾」の具体化を見ているようである。

第二に、バウアーの描く反ファシズム闘争の展望は、一見楽観的である。この展望は、未完のまま残されているが、おそらくこの後、反ファシズム闘争における勝利に満ちた確信へと叙述が続いたと思われる。しかし、この原稿を書いたときにバウアーが置かれていた状況はむしろ憂鬱なものであった。その少し前にナチス・ドイツによるオーストリアの併合が行われ、彼の指導するオーストリア国内の反ファシズム抵抗運動は、壊滅的な打撃を受けるにいたった。非合法抵抗運動の指導者の多数は、国外脱出を企てた。バウアーも、オーストリア国境に近いチェコスロバキアの都市ブリュンからパリへと、抵抗運動の外国ビューローを移転せざるをえなかった。当時バウアーが、いかに気落ちし、憔悴しきっていたかを、彼の友人が詳しく描いている。そのなかで、バウアーは、最後の気力をふりしぼってファシズム論を書いたのである。かかる悲惨な境遇にあったからこそ、かえってバウアーは反ファシズム闘争の将来にたいする明るい展望を描きたかったのかも知れない。

IV むすび

小稿では、晩年におけるバウアーのファシズム論を紹介してきた。1920年代にバウアーは、主にイタリアのファシズムを対象にして、「階級諸力の均衡」論の観点からファシズムを説明した。すなわち、ファシズムは、資本家階級と労働者階級の勢力均衡から生じた政治危機、統治危機に乗じ、これを克服するものとして権力を掌握したという。バウアーのこの見解は、ボナパルティズム論に立ったファシズム論として特徴づけられている。

しかし、その後、1930年代にファシズムの嵐が吹き荒れ、オーストリアの政治と国際政治のなかでファシズムと正面から対決しなければならなくなった時、バウアーは、もはや

ボナパルティズム論の枠内でファシズムを説くことができなくなった。彼は、ボナパルティズム論の観点を次第に薄め、様々な角度からファシズム論を展開する。『二つの大戦の間?』では、彼は、独自の大衆運動として発展したファシズムをかなり詳しく分析してみせる。この問題をパウアーがいかに重視していたかは、彼が、独自の大衆運動をなすか否かで、ファシズムと他の権威主義的軍事的独裁とを区別している点に見いだされる。彼は、また、オーストロ・ファシズムについても、それがイタリアとドイツのファシズムを模倣したもののだが、ついに大衆基盤を獲得できなかったことに注意を促している。彼は、この点にオーストロ・ファシズムの脆弱性を見だし、反ファシズム運動の展望を見いだしたと言える。

遺稿「ファシズム」では、パウアーは、帝国主義、経済と統治のメカニズムに焦点を当ててファシズムを分析している。彼によれば、戦争準備の経済体制を築きあげることによって失業を解消し、労働者階級の不満を一時的に緩和したファシズムも、不生産的消費の拡大と搾取の強化によりつつ戦争へと突っ走っていくにしたがって矛盾を深める。また反ユダヤ主義政策によって小ブルジョワ大衆の不満の矛先をずらした成果も一時的なものにすぎない。こうして、一方における支配階級のなかでの対立と争い、他方における労働者階級と小ブルジョワ大衆の不満と抵抗の激化から、パウアーは、ファシズムの打倒の展望を導き出そうとした。しかし、この作業を全うしない内にその激動の生涯を閉じるにいたった。

追記

小稿の校正段階で、Otto Bauer, *Zwischen zwei Weltkriegen?* の邦訳が出版されたので、以下に記しておく。

オットー・パウアー『二つの大戦のはざままで』酒井農史訳、早稲田大学出版部、1992年。